

地域博物館との連携による博物館学の展開 ー展示パッケージの企画を通じた「資料を見る」実践ー

Museology Class in Collaboration with a Local Museum:
Practices of “Exploring Objects” through Exhibition Package Planning

安 斎 聡 子*

本稿は、地域の小規模博物館との連携のもと、博物館学芸員資格取得に関わる授業で行った、学生による実物資料（被爆衣服）のアウトリーチ¹⁾用展示パッケージの企画に関して報告するものである。この企画の過程では、小規模博物館の現場が抱えている課題と、実物資料に接する機会が限られているという学芸員養成課程の課題の双方について解消の可能性が示された。その一方で、資料館における実務のスケジュールと、課程のスケジュールの不一致がもたらす課題も明らかになった。

展示パッケージの企画に際して重視したのは、学生たちは実物資料に向き合い、それらがもたらす情報を読み取ろうとする体験である。この体験は、過去の出来事に関するリアリティ²⁾を学生たちにもたらしめた。同時に、座学で学んできた、資料に付随する情報の整理や提示の必要性などを、学生たちが自身の体験を踏まえて理解する様子が確認された。

キーワード：博物館学、展示、資料、体験、アウトリーチ

1 学芸員養成課程における課題

本稿は、地域の小規模博物館との連携のもと博物館学芸員資格取得に関わる授業で行った、学生による実物資料（被爆衣服）のアウトリーチ¹⁾用展示パッケージの企画に関する報告である。

学芸員は、博物館法に定められた博物館における専門的職員の資格であり、「博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業」(文部科学省／学芸員について、accessed on 30 October, 2024)を行うものと位置付けられている。この学芸員資格を取得するために大学教育で設置されている科目は、生涯学習概論、博物館概論、博物館経営論、博物館資料論、博物館資料保存論、博物館展示論、博物館情報・メディア論、博物館教育論、博物館

実習であり、学内外で行う博物館実習を除き、基本的には座学を中心とした体系的かつ基礎的な知識の修得が目指されている。

大学における学芸員の養成課程については、従来いくつかの課題が指摘されてきた。その一つが実践的な教育の不足である（内島，2018，p 8）。内島は実践的な教育が示す内容として学芸業務の体験をあげ、博物館実習（館園）を想定して、限られた期間で企画展を開催すること、公共財である所蔵資料を実習生が取り扱うことの難しさを例に挙げている（内島，2018，p 9）。こうした地域の博物館における実習時の困難さに対して、大学博物館での実習の効果を示す内島の論は、学芸員養成課程の一連の検討³⁾とも合致したものである。

同時に、この「学芸員の实務に関わる実践」の手前にも、行うべき教育があると考えられる。いうまでもなく、学芸員に求められる活動の基本は資料の収集・保存、調査・研究、展示、

*青山学院大学

教育普及とされており、いずれの活動も資料を核とするものである。『学芸員養成の充実方策について「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」第2次報告書』（平成21年2月）では、学芸員に求められる専門性を以下のように示しているが、この4項目中3項目が、「資料」をベースに、あるいは「資料」を媒介にして発揮される能力といえる（文部科学省／学芸員養成の充実方策について、accessed on 30 October, 2024）

- 資料及びその専門分野に必要な知識および研究能力を有すること
- 資料に関する収集・保管・展示等の実践技術を有すること
- 資料等を介して、あるいは来館者との直接的な対話等において高いコミュニケーション能力を有し、地域課題の解決に寄与する教育活動等を展開できること
- 住民ニーズの的確な把握と住民参画の促進、これに応える事業等の企画・立案から評価、改善まで、一連の博物館活動を運営管理できる能力を備えていること

博物館実習（学内・館園）では資料に接する機会は比較的確保されている一方で、ここに至るまでに履修する科目では、教示すべき内容も多く、資料を用いた教育実践を組み込むのはそれほど容易ではない。アクティブ・ラーニングの一つであり、五感を使ってモノに直に触れることで実践的かつ体験的に学びを深めていくオブジェクト・ベースト・ラーニング（以降、OBLと表記）という手法がある（Chatterjee and Hannan, 2015）。渡部（2023, p10）はその紹介のなかで、博物館学はもとより日本の大学教育、さらには小等中等教育においても、モノを用いた教授方法が少ないことを指摘している⁴⁾。

先述のように、学芸員の実務の基本には資料を核とした活動がある。資料を観察し情報を読

み取ろうとする、資料を探索する活動は、資料とはいかなるものかを理解することになる。つまり、資料の探索活動は、学芸員の実務を理解する上で、履修科目で取得する知識を具体化し、体験的な理解を得られる重要な活動となることが想定される。資料の探索活動は展示室における観覧者の体験をなぞる行為ともなる。本実践を通して示されるのは、学芸員養成課程において、実物資料に向き合う体験を確保することの意義である。

本稿で使用する用語を整理する。「博物館」とは、博物館法が示すあらゆる種類の博物館を含む総体としての博物館を指している。「学生」とは、博物館学を履修し学芸員資格取得をめざす履修者を指す。「資料」については標本資料や作品を含む、博物館が収蔵するモノ資料（実物）を指すものとする。特にその性質を示す必要がある場合は、「収蔵資料」「展示資料」などを用いるほか、「実物」であることを強調する際には「実物資料」などの言葉を用いている。本稿の冒頭より「資料を見る」「資料と向き合う」と用いてきた表現は、実際に資料を観察・鑑賞し、そこから得られる情報を抽出、構成、類推したりしながら自身の知見にしていく資料の探索活動と同意のものとして使用している。特にその行為を具体的に示す際は、「観察・鑑賞」と表現する。以降、「資料の探索」「資料に向き合う」と表現するのは、上記のような資料をめぐる一連の活動を指す。

2 地域博物館との連携

本実践は2022年後期に開講した「博物館展示論」の中で行われたものである。2020年春より始まった新型コロナウィルス感染症の蔓延により、多くの博物館が一時閉館等の措置を余儀なくされた。その結果、学生においても博物館での体験が大幅に制限されることとなり、資料と向き合う体験は観覧者としても十分とはいえない状況であった。通常でも学芸員資格の取得を希望する学生が皆博物館での体験を十分に持つ

ているとはいえない上に、2022年はまだこの感染症の影響を完全に脱してはならず、博物館での体験が十分にない学生にとって、座学の学習だけでは、表層的な情報の受け渡しに終わってしまうことが危惧された。

このようななか、八王子平和・原爆資料館（東京都）より、所蔵資料の取り扱いについて博物館学を担当する筆者に相談が寄せられた。当該資料館は市民により運営されている草の根的な資料館で、八王子市在住の原爆被爆者の会（八六九会）会員等より寄贈された、原爆に関する文献・資料等を所蔵し、これらの公開を中心的な活動として運営されている。

この資料館には、1945年8月6日の広島への原爆投下時、市内で被爆した中学生、豊嶋長生（たけお）さん（当時14歳）が当時着ていた衣服（以降、被爆衣服と表記）が収蔵されている。被爆当時長生さんは県立広島第二中学校（二中）の1年生で、学徒動員により中島地区で建物疎開の作業に就いていた。長生さん等二中1年生の担当場所は、原爆投下地点から約500mの場所であり、被爆により1年生321名と引率教員4名の全員が死亡している（中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター／ヒロシマの記録－遺影は語る 広島二中、accessed on 30 October, 2024）。長生さんはこの321名の一人である。長生さんは6日のその日、母親に発見されて自宅へ戻るが、全身に大火傷を負い翌7日に息を引き取った。

母親の没後、この被爆衣服は長生さんの遺族（東京都在住）によって保管されていたが、多くの人々にこの衣服を見てもらいたいとの希望から、当該資料館に寄贈された。博物館資料の中でも、繊維製品は比較的脆弱なものの部類に該当するため、保存管理の徹底が望まれるところではあるが、遺族の希望により積極的に資料館の外に持ち出し、展示活用を行ってきた。しかしながら近年、衣服の繊維や組織の損傷が目立つようになり、保存環境をある程度保ちながら、館外に持ち出して活用できるようにするこ

とが求められていた。当該資料館には学芸員資格を持つスタッフがおらず、その方策の検討に苦慮していた。

先述のように、博物館学といえども実習の機会を除けばテキストを元にした座学が中心となり、学生が授業のなかで実際に資料に触れる機会は限られている。博物館学用に用意された資料であればまだしも、社会のなかにある「本物の」博物館資料に実践的に接する機会は少ない。感染症蔓延の影響のみならず、急速に進んだSNSの利用も加わり、若年層の実体験の不足、情報の取得方法の変化は近年指摘されるところである。資料が目の前にあるにもかかわらず、実物の資料ではなくデータベースでその資料を見ようとする履修者がいることについて、驚きを持って語る博物館学芸員の話なども昨今聞くようになってきた。博物館学芸員には、何においても実物の資料を扱うプロフェッショナルであることが期待される。それは、保存管理や展示における取り扱いといった技術面のみならず、資料との出会いで来館者にどのような体験、学びを提供しようとするのかという基本的な姿勢にも関わる問題である。その学芸員を目指す学生において、まずは実物資料と自身が十全に向き合う機会を持つことが必要であると考えられる。資料と向き合うことは、来館者が博物館内で行う活動の大きな要素であると考えられると、この体験が来館者を理解することになることも考えられる。

また、大学の授業のなかで被爆衣服のアウトリーチ用展示パッケージの検討を行うことは、当該資料館においても、事業を行う上での課題の解決につながる実践の機会として捉えられた。当該資料館同様草の根的な市民活動では、専門的職員を持たず、専門的知見につながるものが難しかったり、限られた人員と資源で日々の運営を行っている施設もある。こうした博物館と大学／学生が連携することで、抱えている課題の解消につながるなどが指摘される（小規模ミュージアムネット 小さいとこネット

／小さいとこサミットin東京, accessed on 30 October, 2024)。こうした取り組みは、近年大学に求められる地域貢献に資するものと捉えることも可能であろう（内閣府経済社会総合研究所／大学等の知と人材を活用した持続可能な地方の創生に関する研究会報告書, accessed on 30 October, 2024)。本実践におけるアウトリーチ用展示パッケージについても、当該資料館、大学（学芸員養成課程）双方における課題の解消をめざすものとして実施されることとなった。

展示パッケージの企画のなかで、学生たちが示す資料の探索活動は、博物館展示や学芸員養成を考える上でいくつかの示唆を与えてくれる。また、実際に活動をしている資料館の活動と教育活動を整合させていく上での課題も見えてきた。本稿を通して活動の報告とともに、これらについても記録し、今後の博物館学の授業実践を検討する際の材料として提示したい。

3 授業の実践

本実践は、「博物館展示論」の科目のなかで実施された。「大学における学芸員養成課程の科目のねらいと内容について」(文化庁, accessed on 30 October, 2024)では、博物館展

示論のねらいを「展示の歴史、展示メディア、展示による教育活動、展示の諸形態等に関する理論及び方法に関する知識・技術を習得し、博物館の展示機能に関する基礎的能力を養う」こととし、その具体的な内容として「博物館展示の意義」「博物館展示の実際」「展示の解説活動」を挙げている。これらの定められた内容を満たしつつ、体験的な学習機会としてアウトリーチ用展示パッケージの企画を行うため、授業の進行に合わせて3回、また授業外の課題として構成の検討を行った。また、基本的な知識を習得した上で展示パッケージの企画検討に入れるよう、「博物館展示の意義」「博物館展示の実際」についての講義が終了した段階で実施することとした。展示パッケージの検討に関するスケジュール、各回の概要は、以下の通りである[表1]。なお、このプログラムを体験した2022年度の履修生は21名であった。

各回の実施内容について若干の説明を加えたい。企画検討に際し、第1回には八王子平和・原爆資料館より被爆衣服を借用し、被爆衣服を実際に観覧・観察した。観覧・観察に際し、長方形の机で3つの島状の「展示台」を構成し、その上に被爆衣服を平置きにして展示した。被爆衣服は上着、ズボン、Tシャツ型の肌着（以

[表1：スケジュールと概要]

実施日	概 要
第1回 資料の観覧 2022年11月22日	被爆衣服の観覧とゲスト講師（八王子平和・原爆資料館運営委員）による被爆衣服の来歴・アウトリーチ活動についての講義 ●資料の特徴、状態を把握する ●資料から情報を読み取る ●資料の背景を理解する
第2回 企画の検討 2022年11月29日	展示パッケージの検討 ●保存と展示の機能を理解する ●アウトリーチ（展示）の意義を理解する ●今後の活用方法を考慮しながら、望ましい展示パッケージのあり方を検討する ※展示づくりのプロセス、解説計画の講義と組み合わせて実施
授業外の課題	展示パッケージの企画 ●各自、当該資料のためのアウトリーチ用展示パッケージについて構成を検討し、企画書にまとめる
第3回 企画の発表 2023年1月10日	企画の発表 ●ゲスト講師による資料展示の実際についての講義（展示具製作専門家） ●講評（八王子平和・原爆資料館運営委員、展示具製作専門家、担当教員） ●展示パッケージの製作にあたっての基本的な考え方、方向性についての検討

降、Tシャツと表記)、ランニングシャツ型の肌着(以降、ランニングシャツと表記)の4種類から構成されている。教室での実施のため、学生たちの観察はガラスケース等を介さず直に行うものとなった。

今回学生たちが観察した被爆衣服には、原爆そのものによる影響に加え、救護の過程や保管の過程で加わったいくつかの痕跡が残されている。情報をもたない状態で、初めに学生たち自身による資料の探索を実施した。これがひと段落ついたところで資料館運営委員の竹内氏、教員より、被爆衣服を見て気づくことはあるか、それはどのようなものか、それは何を表しているのか／なぜそのような特徴を示すに至ったと考えるか、資料の状態はどのようなものか、テクスチャーや色などはどのような状況かといった問いかけを行いながら観察を続けた。続いて3人1組のグループに分かれて記録した内容について発表し合い、卓上のホワイトボードに書き出して相互に気づきを確認した。

その後竹内氏より、資料の概要と来歴について説明を受けた。先に触れたように、本資料が広島への原爆投下時に、動員学徒として建物疎開作業を行っていた広島第二中学校生徒が着用していた衣服であること、生徒は母親に見つけ出され自宅に戻った後に息を引き取ったことが説明された。また、被爆衣服は中学生の死後も母親によって保管され、母親の死後にこれを受け継いだ妹より、被爆衣服の活用を望んで八王子平和・原爆資料館に寄贈されたことも併せて説明された。被爆衣服の特徴と、それらが示していることがらについても説明が加えられた。学生たちは、自身の観察活動で得た情報と、解説より得られた情報とを比較しながら、自身の観察活動を俯瞰的に把握した。同時にこれらの体験は、彼らにとってアウトリーチの意義を体験を通して考えることとなった。

被爆衣服は現在、遺族の意思により、資料館から外に出して、多くの人々に見てもらおうアウトリーチ活動での活用に応用されている。授業

の最後に運営委員の竹内氏より、繊維や組織の損傷等の劣化が目立ってきているものの、遺族の意向を尊重し、今後もアウトリーチ活動に活用していきたい、そのためにも活動時にも保存環境を一定程度保つための展示パッケージを製作したい、との館の考えが示され、保存とアウトリーチの両機能を併せ持つ展示パッケージの企画検討への協力依頼が行われた。

第2回には、各自アウトリーチ用展示パッケージの企画の検討を行った。この作業は冬季休暇中等の授業外の課題に引き継がれた。また、この回ではパッケージの検討にあたり、展示づくりのプロセス、解説計画についての講義を組み入れた。これは、アウトリーチ用展示パッケージの製作もまた、小規模ながら展示製作や解説計画の検討と同様のプロセスを踏むものであることによる。

また、第2回と第3回の間に展示づくりの各段階(あるいは完成後)で実施される「展示評価」についての講義、「ユニバーサルデザイン／インクルーシブデザイン」[関係者との協力(他館、所蔵者、専門業者等)]についての講義を設けた。「展示評価」「ユニバーサルデザイン／インクルーシブデザイン」については、展示パッケージの検討過程を体験することにより、その意義や必要性、実施方法について、理解が進むことを期待したものである。

第3回では、各自が検討した企画を持ち寄り、プレゼンテーションを行なった。プレゼンテーションに際して、展示具⁵⁾製作・列品等の専門家である渡辺珠美氏に参加いただき、展示具の種類や機能、展示での使用状況等について講義を受けた。学生たちは、自身のプレゼンテーションに対して、当該資料館の運営委員、展示具製作の専門家、教員より実際の講評を受けることとなった。その後、当該資料館におけるパッケージ製作の方向性を全員で検討した。この過程は、展示製作の際に持たれる関係者による企画検討の場面に該当するものであり、展示製作において、多様な人々との協力が

求められることを展示パッケージの検討を通して理解できるよう、「関係者との協力（他館、所蔵者、専門業者等）」を視野に入れたものである。

4 授業の展開と得られた気づき

計3回の講義のうち、ここで取り上げるのは第1回に実施した「資料の観察」である。第1回では学生たちは、当該資料館の収蔵資料である被爆衣服を実際に探索し、その後自身のその活動を振り返った。授業の経過と学生たちの探索活動を追いながら、その気づき等を記すこととする。

(1) 学生たちの資料の探索活動

先述のように4点の被爆衣服には、原爆投下時、救護時、保管時に加わったそれらの痕跡をはじめとする、いくつかの特徴がある。その特徴の把握は、初見の段階では学生自身、または学生間のやり取りでなされ、その後当該資料館の竹内氏、教員による問いかけや解説により、読み取れる情報が質・量ともに充実していった。これらの区分はグループワークの際に学生によって書き出されたり、表明されたりしたものによる。また、自身の観察活動と気づきの変化をふりかえったコメントは、第3回の授業で得られたものである。これらについては将来、授業実践の改善と、報告論文として文章化する際に使用することを伝え、了承を得た上で用いている。

1) 被爆衣服の損傷と原爆との関連

学生から真っ先に挙がった気づきは、上着の損傷の激しさと、左右でその状況が異なることであった。上着は各部分を元の位置に配置することが難しいほど損傷しており、袖部分、前身頃に欠落がある。特に左側は袖から前身頃にかけて大きく欠落した箇所が目につく。学生の一人は、「こっちの方が焼けているからこっちの方に原爆が落ちたんだということなどを推測

し」、被爆当時、男子生徒が熱線を浴びた方角、すなわち原爆投下地点に対してどのような角度をとっていたのかを想定したことを振り返っていた。上着の焼失状況と原爆の炸裂した位置を結びつけて考えたことを記した学生は他に1名いた。

2) 認識票としての衣服への記載

上着の左身頃上部には、自宅住所、所属（学校・学年・学級）、名前、血液型、生年月日が書かれている。同様の情報は、Tシャツ、ランニングシャツ、ズボンにもそれぞれ書き込まれている。これらの情報が衣服に記されていることについては全てのグループで言及されていたが、これらがいわゆる「認識票」の役割を果たしていたことへの気づきは表明されなかった。また、書き込まれた住所や名前に、「一人の少年が巻き込まれた悲劇」や「この中学生が確かに存在していた」ことへのリアリティ²⁾を感じたことを示すコメントが挙がっていた。使用された旧漢字から、かつて起きた歴史的な出来事を実感したと回答する者もいた。

3) ボタンの刻印

上着のボタンには「中」の文字とローマ数字の「I」を組み合わせたような刻印が確認できる。一部の学生はこれに着目し、上着が中学校の制服であると推察していた。また、上着のボタンが金属であることから、学生の一人は陶製ボタンが代用されていた事例に触れ、当時金属は供出対象であったことから供出前の古い制服だった可能性を指摘していた。ボタンの刻印に気づかない学生、刻印の文字に注意は向いても学生があらかじめ持っている知識や体験の範囲等に、資料の読み取りが影響している様子が確認された。なお、ボタンの刻印は、広島第二中学校の「中」と「二」を組み合わせたものであることが資料館運営委員の竹内氏より説明された。

4) 血液等によるシミ

Tシャツ、ランニングシャツ、ズボンには被爆で大火傷を負った男子生徒の血液や体液による赤茶色のシミが広がっている。上着は肌に直接触れる部分が少なかったと想定され、現存する部分についてはシミの広がりも小さい。また、上着、ズボンは生地がカーキ色であることから赤茶色が目立たない。シミが顕著なのはTシャツ、ランニングシャツである。これについて学生たちは血液によるものであるとの認識を示していた。

赤茶色に染まったTシャツの襟ぐりには、手縫いの木綿糸と思われる白い縫い目がつけられており、注意して見ることができれば気づける一つの特徴である。一部の学生から、糸が赤茶色に染まっていないことから、死後に縫われたものであることが指摘され、その後の竹内氏による、母親が男子学生の死後に補修を施した、との説明と符合することが確認された。

5) 生地に入れられた切れ込み

ランニングシャツ、ズボンにはハサミによる直線の大きな切れ込みが入れられている。ズボンには両脚部ともに裾からウエストにかけて前中心に切れ込みが入っており、通常筒状になっている脚部が開かれている。ランニングシャツは前身頃の肩山の下（胸元付近）で真横にハサミが入れられ、前身頃と後ろ身頃とに切り離されている。また、前身頃中央部にも、裾から襟ぐりにかけて一直線に垂直の切れ込みが見られる⁶⁾。

竹内氏より、これらの切れ込みが、火傷により衣服が皮膚に貼りつき、脱がせることが難しかったために入れられたものであることが説明された。この説明を聞いて初めて火傷の大きさを想像できたとコメントした学生がいた。原爆投下後の様子を記した広島の手記では、大火傷により皮膚と衣服が貼り付いていたため、衣服を切って取り除いたとの数多くの証言を読むことができる。これらを知っていれば、同様のこ

とがこの被爆衣服にも施されたことが想定できるが、学生たちには難しかったようである。

また、学生から指摘はなかったが、切り込みが入った衣服はランニングシャツとズボンである。焼け落ちた可能性のある上着の袖部分を除けば、いずれも皮膚に直接触れる箇所であり、被爆衣服の観察により、当時男子生徒が負った火傷の状態などを窺い知ることができる。

6) 当て布

上着、ズボンには裏側から当て布がミシンによって施されている。上着は繊維や組織の劣化が激しく、資料の移し替えなどの際でも僅かに繊維が落ちる状態であるが、現在、上着が上着としての形態を保っているのは、この当て布があることによる。資料館は遺族より、裏当ては男子生徒の死後母親が保管の際に施したものの説明を受けている。授業でも竹内氏よりそのことが説明され、多くの学生から「子どもの衣服を残したいという母親の願い」に共感するコメントや、「被爆衣服の解説には母の思いも入れるべきである」との意見が記されていた。

しかし、丁寧に観察すると、上着の背中部分の当て布には肩に近い部分に赤茶色のシミが入っており、その部分のミシン目も同じように赤茶色に染まっていることがわかる。このことは、この当て布が衣服の補強のために被爆前に施されたものであったことを示している可能性がある。また、ズボンの当て布についても、被爆前に施されたものである可能性が指摘できる。ズボンは救護時に両脚部ともに前中心で切り開かれているが、その部分の当て布も、同様に同じ位置で切り開かれており、くすみが見られる。

臀部に施された当て布は白いミシン目が目立つ、比較的汚れない布である。臀部であることから、ズボンにシミができることを下着が防いだ可能性や、男子生徒の死後残された衣服を母親が洗濯・保管していることから、怪我の箇所や繊維の材質によっては汚れの付着や洗浄に

よる効果の程度が異なることも考えられる。また、被爆から長い年月が経っていることを考えると、保管時に汚れがつく可能性もある。これらのことから補修がいつの時点のものかは性急に判断することはできないが、少なくとも、資料の観察に用いた時間が30分程度の間に、学生がこれらの細部に目を向け、推論を展開することは難しかったと判断される。

7) サイズ

さらに、学生たちは一様に上着、Tシャツ、ランニングシャツの小ささを指摘していた。一部の学生は、戦中の食糧難などがその背景にあるのではないかと推察した。その一方で、ズボンの大きさととの不調和や、不調和の背景にズボンが更生服⁷⁾であった可能性についてのコメントは初見では得られなかった。ここからうかがえるのは、資料の観察が直ちに資料間の比較や関連づけに結びついているわけではない様子である。

(2) 観察活動のふりかえり

第3回に収集した所感からは、学生たちが自身の観察活動を俯瞰的に振り返っている様子が見て取れた。

1) 資料を探索することの難しさ

学生の観察活動とその後のコメントから見えてくるのは、資料を観察すること、資料が示す情報を読み取ることの困難さである。この困難さが生じる原因について、一人の学生が表明したのは、資料が衣服だったことであった。被爆衣服は、焼け落ちや血液等によるシミなどが残されており、当然ながら通常の状態ではない。しかし衣服自体は学生たちの日常に存在する、ごく当たり前のものである。4点の被爆衣服のうち、ズボン、Tシャツは現在でも形状がほぼ変わらない。上着は損傷が激しく、またランニングシャツは切り込みにより、元の形状を思い描くにはある程度の観察が必要であるが、衣

服として紹介された時点で、既知のものとの判断がはたらいた可能性がある。このような認識のもとで資料に接した結果、初見の際には注意深く見ることの必要性が感じられなかったのではないかと、この学生は自身の行動を振り返っている。

また、一部の学生からは、説明を聞くまでどのようなになっているのか分からなかったことが表明されていた。確かに上着は損傷が激しく、一見しただけではその構造を判断することは難しいが、前立てやポケット、ボタン等は元の形を留めており、比較的目に入りやすい。それがむしろ、衣服のようだがもはや衣服の体を成していないものとして、怖さを伴って認識され、それ以上の観察を妨げる結果となった可能性もある。同様な意見は別の学生からも表明されており、自分の探索行動をふりかえる「あまりに見たことがないものだ」と、そういうものだとし片付けてしまう」といった回答にも表れている。両回答は、被爆衣服を前者が「既知のもの」、後者が「未知のもの」という性質の異なるものとして捉えているにもかかわらず、派生した結果はいずれも、資料と距離を置く姿勢である。

先入観やある種の固定観念⁸⁾も資料を観察の視点を失わせていた可能性がある。別の学生は、「初見では被爆者が身につけていたもので、資料の状態から当時の悲惨さを伝えようとしているのかな、ぐらいの浅いイメージしか湧かなかった」とのコメントを寄せていた。この学生は、以前に同様の衣服を別の博物館で見たことがあると答えた学生のうちの一人である。以前に見た体験が、今回観察対象となった被爆衣服に対して、「以前見たものと同じ」被爆者の身につけていたもので、当時の悲惨さを伝えようとする施設側の意図のもとに展示される同等のものとして分類させた可能性がある。

2) 「人」が見えることと資料への共感の関連

しかし、1)に示したいずれの学生の場合

でも、説明を受けて改めて観察した被爆衣服は、被害の状況や遺族の思いがイメージできる、学生の言葉を借りれば「当事者に寄り添う気持ち」になれる資料に変化している。視点の馴化や先入観、固定観念を壊したのは、資料の見方をガイドしたり、問いかけたり、解説するといった働きかけである。学生たちは、効果的な補助が加わることによって、より資料からより多くの情報を得られること、それにより資料の見え方が変化することを体験した。このことは、展示解説や解説ツールの役割の体験的な理解に繋がるのが想定された。

学生のコメントの大半を占めたのは、被爆衣服の本来の持ち主である男子学生、被爆衣服を保管していた遺族、特に母親の行為とアウトリーチ活動での活用を望む遺族の意志への共感である。初見ではある種の「畏怖」を感じた被爆衣服についても、問いかけや解説を聞くことで資料をより丁寧に、男子中学生の苦痛や母親の無念さを想像するようになっていった。その際に解説で語られていたのは、病気のために留年してやっと入った中学にも関わらず、学徒動員で満足に勉強をする機会もなく、大火傷を負いながら逝った男子学生やその被爆衣服の状態、そして衣服を洗濯し・補修してタンスの奥に保管し、被爆衣服について語ることなく死去した母親、「死蔵」ではなく活用してほしいと被爆衣服を寄贈した遺族といった、人の存在についてである。学生のコメントの大半に「男子学生の苦しみ」「遺族の残したい、伝えたいという強い思い」への共感と、資料が伝える情報の重要性、そしてその保存と活用の意義が表れていた。実際、被爆衣服の初見の感想では、怖さ、悲しさというネガティブな感情の生起について触れたものが半数近くを占めた。しかし、問いかけや解説により、「分からないもの」が「分かるもの」になっていく過程で、被爆衣服は過去の出来事を雄弁に語る唯一無二の存在として認識されるようになっていく。

なお、説明を聞くまでどのようなになっている

のか分からなかったと表明した学生の一人は、「説明を聞いてリアリティを感じることができたが、それはすなわち情報（説明）にリアリティがあるということであり、被爆衣服が実物でなくても情報があればいいということになるのではないか」という意見を寄せていた。しかし同時にこの学生は、衣服に入れられた地名に「フィクションではない出来事が示されている」と資料の重要性について表明しており、実物資料であることに重要性を見出してもいた。

3) 「実物」であることの意義

2)でも触れたように、過去の出来事（原爆投下／被爆）のリアリティを資料が実物であることに結びつけて捉えている様子が、学生たちのコメントに見て取れる。たとえば、学生からは「知識としては原爆投下のことを知っていたが、本当に起きたことだとの実感を持った」「この資料があの日、あの時、あの場所にあったと思うと、原爆のことがリアルに感じられるようになってきた」といったコメントとともに、「実物で感じるリアリティはレプリカや写真等では失われるだろう」「写真で見ると自らの目で資料を見るのとでは異なる」「実物だからこそ感じる緊張感や気後れするほどの存在感」「衣服だけでも原爆や被爆の悲惨さを感じることができた」といった表現で、実物資料の展示公開に意義や必要性を認めていた。

5 資料を見るということ

学生の資料の探索から得られた示唆を以下に整理し、考察を加えたい。

(1) 資料の探索と認知バイアス

学生のコメントから見えてきたのは、資料の探索においても認知バイアスの存在を考慮する必要がある。4 (2) の1)に登場した、衣服＝見知ったもの、として済ませたとする学生のコメントから、この認識（認知バイアス）が存在していることがわかる。被爆衣服を見る、

資料を観察するという前提に立っても簡単にこの認識が転換されないことが示されている。このことは、同様のことが展示室でも起きている可能性を示している。展示資料を見るという行為もまた、日常の行為に接続したものであり、認知のクセを変えることは簡単ではない。この点からも、解説活動の重要性は明らかであろう。また、展示空間の非日常性がその転換を促す可能性について検討する意義も示唆される。

また、資料を観察し情報を引き出そうと試みる、資料の探索活動は、来館者の行動の追体験を意識的に行う実践でもある。学生が早期に資料を見ることの困難さと可能性に気づく機会は、学芸員資格取得をめざす上で意味のある体験になると考えられる。

(2) 知識と体験を資源とした資料の探索

学生たちの「資料の探索」活動からは、何をどこまで気付けるかは本人が持っている体験や知識に負うところが大きいという点も見えてくる。上着のボタンが陶製ではないことにコメントした学生のように、知識があれば被爆衣服の背景にある社会情勢（たとえば金属の供出）等と結びつけて、被爆衣服から情報を読み取ることができる。そしてそれが、この上着が供出前に作られたもので、誰かの「お古」だった可能性へとつながる。もちろん上着が「お古」であったか否かはわからない（少なくとも上着については遺族からそのようなエピソードは得られていない）。実際、金属供出の状況は広島市内の各地区によっても状況が異なったようであり、よく知られている広島平和記念資料館の「仲ちゃんの三輪車」⁹⁾も供出されることなく男の子とともに被爆している。被爆衣服に入れられた切れ込みもまた、怪我や火傷を負った（あるいは負ったところを見たことがある）体験や、被爆体験手記等を読んだ体験があれば、その解釈の幅も広がったであろう。

当然のことながら、伝わっていない情報以上のことは直ちには分からないし、資料の来歴や

背景情報を理解するには、相応の調査が必要である。真偽の程を確認する手段はもはや失われている可能性もある。学芸員養成の観点から言えば、その作業はすなわち学芸員に求められる活動であり、自身の力で資料とそれが伝える事象に接近しようとする「探索」の行為は、その重要性を身をもって体験できるプロセスにもなっている。同時に、探索者の新たな体験、知見となり、資料の探索においても、日常においても次の探索に生きる資源となる。

また、改めて指摘するまでもないが、「資料の探索」を複数人で行うこと（授業の実践においてはグループワークを入れることなど）の意義も確認された。上衣のボタンが金属製であることに気づいたのは一人の学生だけであった。しかし、グループでその気づきを相互に紹介しあった結果、同じグループのメンバーはその知見を共有することになった。ここに、他者の知見・体験を自身の知見・体験に変えていく行為、まさに協働的な学びが成立している。

(3) 出来事のリアリティ

4（2）の3）に見られるように、学生の所感には、「実物であることの意義」を表明する際、出来事のリアリティとそれを結びつけて語っているものが散見された。その際、学生たちが表現したのは「ガラス越しではない」「写真ではない」といった言葉である。

学生たちの表現にもあるように、今回の資料の観察は、ガラスケースのない状態で行われている。観察の際、多くの学生は身を屈め、体を資料に寄せ、あるいは顔を接近させ覗き込むといった身体的な動きを行っていた。その一連の過程のなかで、学生たちは被爆衣服それぞれの色や構造、縫い目、切れ込み、質感の違いなどを掴んでいった。被爆衣服が発するわずかな匂いを感じとった学生もいた。アフォーダンス理論（Gibson,1979；佐々木, 2022）に沿えば、身体の位置どりを変えれば対象物（資料）との関係が変化し、得られる情報もまた変わってく

る。自身の身体の変化と得られる情報の変化の実感が、資料の確からしさ、資料への信頼感を獲得させ、それが原爆投下という過去の出来事のリアリティへとつながった／置き換わった可能性もある。詳細な検証が必要ではあるが、今後の検討の材料として記しておきたい。

(4) 資料と人のネットワーク

4 (2) の2) で示した、人の営みを知ることで、見知らぬ資料も身近な資料になっていく様子についても今一度、触れておきたい。博物館に収蔵・展示されている資料には、人の営みが必ず伴う。その資料を作った人、用いた人、そしてそれを受け継ぎ保管してきた人がある。被爆衣服に接した学生たちは、被爆で大火傷を負った男子中学生の苦痛、人生をそこで終わらせられた無念さ、そして資料を丁寧に清め繕いながら手元に置き続けた母親の子どもへの愛情と嘆きを想像していた。学生の所感のなかには、探索の過程で見知らぬ資料が理解でき、共感できる資料となっていったことを指摘するものもある。

学生たち自身が資料の探索活動のなかで見出した、資料をめぐる人々の行為はここまでである。しかし、その行為のつながりはその先にも続く。この被爆衣服に関して言えば、アウトリーチ活動の先で被爆衣服に出会う人がある。また、被爆衣服の展示パッケージを企画する学生自身もそのネットワークにつながることになる。実際の博物館活動に置き換えて考えることができれば、調査研究・展示公開等を通してその資料が語ることを伝えようとする学芸員、展示室等でその資料に向き合う観覧者等もまた、この資料につながる営みの主体である。観覧者は「資料の探索」という行為で、人々の営みの総体にさらなる一步を足す。資料は単なる資料ではない。何に気づき何を見逃すのか、何を感じ何を感じないのか。それはモノを通して自分を知り、社会を知る行為でもある (Shuh, 1982)。資料とはそのような行為を促すもので

ある。

6 今後の展望と課題

今回、「博物館展示論」で実施したのは、地域の小規模博物館との連携のもと、計3回の授業と課題の作成を通じて、収蔵資料のアウトリーチ用展示パッケージを企画するというプログラムである。第3回に行った、学生たちによる企画案のプレゼンテーションでは、被爆衣服のほか、展示会場を構成するための展示パネルや小型什器などを完備した、ボックスから小型自動車に至る様々なパッケージが提案された。そのなかで講評者の評価が高かった案は、4面から引き出し状の薄型ケースが1枚ずつ引き出されて展示台となるパッケージであった。構造的に強度の面で課題はあったが、引き出し面を一方向に限定することで、アウトリーチ先での省スペース化が図れること、材質に留意すれば保存上の課題を解決できる見込みがあることなどの点で、実現性も高いものであった。

多くの案で、脆弱な被爆衣服を平置きにして搬入・搬出、展示される形態が取られていた。また、展示を構成するものとして、資料のみならず、解説パネルなどの情報が組み合わされており、自らの資料の探索活動での気づきが反映されていると判断された。

同時にこの過程で明らかになったのは、実社会の動きと開講スケジュールの不一致という課題である。学生が展示パッケージの企画を行ってから、その完成までに約1年が経過した。2024年度にはすでに企画を行った学生は在籍しておらず、授業等を通じてその報告を行うことができなかった。企画のみならず、その後の経過に関わることができれば、より実践的な学びの機会となったことが想定されるが、仮に学生が在籍していたとしても、単年度で進んでいく学芸員養成過程のなかで、複数年度にわたって同一のプログラムを学生が続けることは難しい。2023年度の展示パッケージの設計、製作に

本学学生が関わることはなかったが、仮に関わったとしても、同じ科目で実施する場合、設計、製作に関わる学生は企画した学生とは別の学生ということになる。大学、科目としての連続性は保たれるものの、学生個人の体験としての連続性を維持することは難しい。

授業の終了後、実際にこの授業で示された企画の方針と企画案の一部が採用され、いわゆる「中性紙」による引き出し式の保存箱兼展示ケースとして製作することが決定された。授業が実施された翌年2023年より詳細検討、設計、製作が行われ、2024年春、アウトリーチ用の展示パッケージが完成している。教育活動のためのプログラムが、実社会の資料館の課題に接続しており、その活動の一端を他の専門家とともに担うという体験は、受け身になりがちな学生の意識に転換をもたらすものとなった可能性がある。個人差はあるものの学生の所感には、「資料を見ること、情報を伝えることに大きな意義と責任を感じた」という表現が見られるなど、資料の保存だけでなく、資料を見る目に責任が伴うことを指摘するものが散見された。限られた時間ではあったが、資料自体に付されたアウトリーチという目的を理解し、その活動を支援することを通じて、学生たちの資料の観察は責任を伴った一定の深度をもつものになったと考えられる。

博物館学の展開における資料の探索活動については、今後も議論が必要である。本稿で示した事例は、20余人という限られた学生を対象としたものであり、学生個人に依るところが大きく、その結果を直ちに一般化することはできない。OBLやアフォーダンス理論、資料もまたエージェントとして捉え、来館者との関係性を捉えるアクターネットワーク理論等の立場からの研究も進んでいる。これらの整理も踏まえ、改めて別の機会でもより精度を高めた検討を行いたい。

謝辞

授業実践として被爆衣服のアウトリーチ用展示パッケージの企画検討の機会を与えてくださった八王子平和・原爆資料館と運営委員の竹内良男氏、展示製作の専門家として適切な助言と製作への道筋をつけてくださった山本珠美氏、鑑賞教育に関してアドバイスをくださった阿部祐子氏、広島第二中学校の金属製ボタン等について情報を寄せてくださった辻靖司氏、そして学びを共有してくれた2022年度履修生に謝意を表します。

注

- 1) 公的機関や施設等で行われている、機関・施設外に出向いて実施される活動のことを指し、その範囲は教育、福祉、介護など広い。博物館の場合は主に資料の館外持ち出しや出前授業などの館外活動を指すことが多い。
- 2) 「リアリティ」については、「アクチュアリティ」との区分や関連における議論があるが、本稿ではこれらには踏み込まず、一般に用いられる「リアリティ」に統一して使用する。
- 3) たとえば、学芸員養成の充実方策について「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」第2次報告書（平成21年2月）は、「大学が有する学術標本や研究資料等の資源を、博物館実習等において積極的に活用する」ことを求めている（文部科学省／学芸員養成の充実方策について、accessed on 30 October, 2024）。
- 4) 渡部（2023, p10）は、OBLにおけるモノと博物館学で求められる資料の取り扱いとは、必ずしも一致するものではないと指摘している。両者のめざす学びが、第一義的に、モノ（資料）についての学び／モノ（資料）を通した学びなのかといった点は整理が必要であろう。
- 5) 演示具、展示パーツとも言う。資料等を展示する際に、資料を安全に、かつ来館者の

見やすさを担保しながら展示するために用いられる補助具を指す。

- 6) この切り開かれた状態が、一部の学生にとってランニングシャツと認識することが難しかった模様で、「エプロン (?)」「エプロンのような下着」といった表現を用いたコメントが見られた。
- 7) 衣服の材料が乏しかった戦中、戦後の一時期に、既存の衣服等に手を加えて、別の服に仕立てる「更生服」が推奨されていた。
- 8) 先入観や固定観念は展示空間に対しても示されていた。被爆衣服のような負の出来事を伝える資料は、比較的暗い空間で展示されることが一般的であろう。そのような展示イメージを持っていた学生にとって、明るい教室内で見える被爆衣服は、空間との不調和が強調された違和感あるものだったようである。一人の学生は、その違和感を指摘し、展示方法には工夫が必要である、と述べていたことを付記しておきたい。
- 9) 三輪車で遊んでいた際に被爆し死亡した伸ちゃん（鎌谷伸一さん／当時3歳）と共に自宅の庭に埋められていた。広島平和記念資料館を代表する著名な資料の一つである。

引用文献

- 文化庁／大学における学芸員養成課程の科目のねらいと内容について（令和6年3月25日文化審議会第5期博物館部会（accessed on 30 October, 2024）
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/about/pdf/94072501_01.pdf
- Chatterjee, H. J. & Hannan, L. (2015). *Engaging the Senses: Object-Based Learning in Higher Education*. London: Routledge.
- Gibson, J. J. (1979). *The Ecological Approach to Visual Perception*, Boston: Houghton Mifflin. 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻（訳）（1985）『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』東京：サイエンス社.
- 文部科学省／学芸員について（accessed on 30 October, 2024）
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/about/
- 文部科学省／学芸員養成の充実方策について「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」第2次報告書（平成21年2月）（accessed on 30 October, 2024）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/014/gaiyou/1246188.htm
- 内閣府経済社会総合研究所／大学等の知と人材を活用した持続可能な地方の創生に関する研究会報告書（平成28年3月）（accessed on 30 October, 2024）
<https://www.esri.cao.go.jp/jp/esri/prj/hou/hou074/hou74.pdf>
- 小規模ミュージアムネット 小さいとこネット／小さいとこサミットin東京（accessed on 30 October, 2024）
<https://chiisaitokonet.jimdofree.com/what-s-new/>
- 中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター／ヒロシマの記録-遺影は語る 広島二中（accessed on 30 October, 2024）
<https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=20684>
- 佐々木正人（2022）.『新版 アフォーダンス』, 東京：岩波書店.
- Shue J. H. (1982). "Teaching Yourself to Teach with Objects" *Journal of Education* 7(4), 8-15.
- 内島美奈子（2018）. 大学博物館が取り組む実践的学生教育-西南学院大学博物館の学芸調査員制度を事例に, 西南学院大学博物館研究紀要(6), 5-16.
- 渡部葉子（2003）. モノを通したコミュニケーション-オブジェクト・ベースト・ラーニングの実践と可能性, *The KeMCo Review* 1, 9-21.

Museology Class in Collaboration with a Local Museum: Practices of “Exploring Objects” through Exhibition Package Planning

Akiko ANZAI (Aoyama Gakuin University)

This article reports the planning of an outreach exhibition package for museum objects (atomic bomb clothing) by students for a museum curator certification course in collaboration with a small regional museum. The planning process demonstrated the possibility of solving both the problems encountered by small museums and those of training programs for students with limited opportunities to be in contact with actual objects. Additionally, it revealed the problems caused by the discrepancy between the schedules of practical work in the museum and the program.

In planning the exhibition package, the author emphasized the experience of students observing actual objects and attempting to read the information they provided. This experience provided students with a sense of reality regarding past events. Additionally, the author confirmed that the students understood the necessity of organizing and presenting the information accompanying the objects, which they had learned in classroom lectures based on their own experiences.

Keywords : museology, exhibition, object, experience, outreach